

行われているが、耳で聞いてわかりやすい再話をするとの出来る人が日本のあちこちにいる、という状態になつたら、昔話が生きて伝承された時代にすこし近付くのではないかと期待している。

そろそろ再話コースの成果を、世に発表する段階になりつつある。基礎コース終了後、昔話を語りたいという人もいる。そういう人の為には、「語りコース」を用意している。基礎コースの「語りと講義」を担当しているベテランの語り手が、約一年半、六回の講義と実技指導を行つ。この場合にも、基礎コースで学んだ様式と語法についての理解が、よい語りを生み出している。

以上、昔話の研究と子どものための絵本や再話とのあいだの乖離をすこしでも埋めるべく、私がしているささやかな試みを報告した。

この試みのなかで私を励ましてくれるのは、私の考え方を理解して、熱心に勉強する人がたくさんいるということである。一九九二年から第一期には、旭川から鹿児島までの一〇都市で、つぎの第二期には、旭川から尾道までの一三都市で、現在進行中の第三期には、旭川から那覇までの一四都市で開講している。その人達が、学んだことを活かして、子ども達のために、昔話本来の形を保つた絵本や再話を選んでくれたら、私はうれしい。そしてそれをまわりの人達にも広げてくれるだろうと期待している。

昔話の様式論を専攻してきた者として、人類の貴重な文化財である昔話を、口伝えされてきたその形で子どもたちに渡すことに研究を活かすべく、これからも力を尽くしたいと思つてゐる。

(おざわ・としお／筑波大学名誉教授)

小特集・研究者というメディア

現代若者の「**口承**」世界を フイールドワークすること

——『市川の伝承民話』の試みを例として——

根 岸 英 之

はじめに

一九八〇年代から、「口裂け女」や「学校の怪談」などへの関心が深まり、これらの話の収集は「現代民話」「現代伝説」「都市伝説」などの呼称の下、進展を見せてゐる。しかし、これらの資料の多くは、(1)アンケート用紙を用いた筆記回答であること、(2)「怪談」や「怖い話」を中心とした収集であること、(3)話のみを独立的に扱い「話×生成の〈場〉」(文脈)への言及が少ないと、(4)話の内容(モティーフ)分析が中心で表現(ディスクール)への言及が手薄なこと、などから、「**口承文芸**」研究のアプローチとして、いささか不満を感じてゐる。

本稿では、論者自身の関わった現代若者へのフイールドワークを基に、論者がどのように介在しどのようにすることを試みてきたのかを紹介し、研究者というメディアとしての自覚を促すものである。

一、『市川の伝承民話』での試み

論者の所属する市川民話の会は、市川市教育委員会から調査委託を受けて、その成果を『市川の伝承民話』としてまとめて来た。一九八〇年発行の第一集から「世間話」「伝説」「昔話」「唄」「生活譚」などにテープ起こし資料を分類し、ことに「生活譚」の分類の下、「生活に関する苦労話的話題や地域の暮らしぶりが窺える話」を積極的に採り上げている点が注目される。現場に根差した資料化を図り、お定まりの民話観に終始しない問題提起を孕んだ資料集であるといつてよい。⁽³⁾

そんな第六・七集（一九九八・九九）で試みたのが、一九九〇年前後に、昭和四十年代～五十年代生まれの学校の同窓生から聞いた「現代若者の学校話」という資料群の提示である。この試みについては、論者による第六集の「あとがき」で次のように述べた。長くなるが一般読者への働きかけの具体として引用したい。

（略）ここに収めた話は、従来の分類でいえば「世間話」に相当するものだが、「学校話」という項を独立させることによって、単に「学校を題材にした話」という意味以上に、「学校」という〈場〉で交わされる話「学校制度の中では産み出される様々な言説」といった側面まで浮き彫りにすることを意図したものである。一般的なイメージでは、民話や民俗学というのは、現代社会と無縁な昔ながらの失われゆくものを記録保存するものであるとの印象が強いが、決してそのような後ろ向きなものでない（略）。

このような話を行政から出す民話集で扱うことに違和感を感じる方もあるかと思うが、（略）かつての狐に化かされた話などもありアリティのある生々しい話であつたのだから、こうした話を研究することによって、古い話も深く理解することになると考えられる。むしろ、我々の回りで無自覚に取り交わされている等身大の「ことば」を客体化・異化することによって、なぜこのような話が産み出され、市川の「この場所」で伝承されているのかを考える手掛けりしたい。大人は若者の話から現代の学校社会のありようを読み解くのもよし、若者は現代の話から市川のむかしに興味をもつのもよし、本資料集が、世代を超えて「ふるさと市川」を考える手段として読まれることを願つて止まない。⁽⁴⁾

二、ディスクール分析から見える〈口承〉世界

（略）ここで試みようとしたことの第一は、（1）冒頭で述べた従来の友人の集まる同窓会が多かつたため、（2）「怪談」以外の「思い出話」なども資料化できしたこと、（3）複数の話し手による「話」生成の「場」のありようを資料化できること、更に地方自治体から出資資料集があつたために、（4）一定の地域の中で資料の位置付けを図つたこと、などが実践できたものと考える。

そのごく一例を、「口裂け女」を例に垣間見たい。

○話例・□裂け女 話者は一九七〇年前後生まれの学生複数
1根岸 ね、□裂け女はどんな風に聞いてた?

(略)

5山田 「あたしがいい?」とか聞いて、で「きれい」ってゆうと、
6曾根 こうやって(マスクを外す身振り)「これでもきれい?」つ
てゆうんだよね。

7山田 で「違う」ってゆうとなんかとんでもないことしてくると
か(笑)。

8森 だからどっちにしても駄目なんだよね。

9西村 べつこう餡を投げればいいとか(笑)。

10山田 そしてなんかオイルをかがせると逃げるとか(笑)。

14山田 (略)
船橋のイトーヨーカドーの、横断ところに出たとかいうハ
ナシは(笑)聞いたけど。

(略)

21野原 中國分小(に通っていたとき出た)。だつて、「今日は曾谷
にいる」とか言われてさあ、大泣きしたんだもん学校で。

「泣きそうな声で」お母ちゃん帰れないよう、迎えに来て

よう」とか言つたら迎えに来てくれた(笑)。

22渡辺 そんなんのどうやつて分かるの、曾谷に出たなんて(一同

(略)

29森 なんだか□裂け女のやつでねえ、なんだつけ、カツチユウ
(葛飾中)だつたつけ、なんかねえ小学校でねえみんなで

避難訓練した時にねえ、校長先生がね、「あの屋上から火
が」つつてみんなバツ見たらね、その屋上から□裂け
女が見てたんだよっていうハナシがあつたよ。

30伊藤 やあこわあい。

31西村 面白い(笑)。

32渡辺 待つてたのかなあ(笑)。

33根岸 なんか「□裂け女が出るからあ、今日はみんなできちんと
帰りなさい」って先生、(小)学校の先生に言われた、覚
えある。

34伊藤 ああ、あつたあつたあつた。

(略)

43山田 親とか聞くとなんかこう、「□裂け女」つて子供の言う
そのまま信じてるんじゃなくてなんか、「変質者が出
ちゃつた、出たんじやないか」みたいな格好で心配してた
みたい。

44森 新聞載つてなかつた?「□裂け女出現」つて。

(略)

48曾根 出てた、あと週刊誌とか。

(以下略)

この資料は、第六集に収めたもので、一九九〇年に論者の所属し
た演劇部のOB会で、場が「思い出話」モードになつたときに聞け
たものである。(話)生成の(場)の順に資料化しており、この直
前の「人面犬」の話題に次いで、論者から質問する形で聞いたもの

である。調査者の発話も資料化することにより、調査者による質問を受けて話し出されたものか、調査者以外の人から話題になつたものかを示し、「研究者」というメディアの介在を明示している。

もっとも、今回の「場」に限つて言えば、同席者たちの意識下に「根岸の提起によつてウワサバナシをフィールドワークする場」という制度的状況は厳然とあるのだが、高校時代を共有した同窓生として、やがて、調査者—被調査者という一方的な関係性よりも、誰もが時に「話し手」になり時に「聞き手」になるといった関係性が形成されていたようを感じられる。

5から10は、まさに入れ替わり立ち替わり話し手になつてゐる部分であり、前の人々の発話を受けて、次々と一つの話題（トピック）が複数の話し手によつて生成されている。川田順造氏のいう「シングルオーラー」に相当する状況であり、こうしたシンクローナーこそ、アンケート回答からは見えて來ない、現代若者の「口承」の「場」といえよう。

次いで、話される21のエピソードは、「口裂け女の出現」という主題にまつわる野原固有の話題であり、ここでは野原以外は「聞き手」となる。このディスクールについて、地域性に根差した民俗誌的分析をするとき、一つの解釈が可能となる。それは、「口避け女は学区外に出現するものとして言説化される」ということである。

野原は、小学校の途中で学区外の曾谷に引っ越ししたため、「曾谷に出てる」というわざを聞いて帰れなくなつたのである。「学区外に出現する」というディスクールは、他の複数の資料にも認められる。一時期、「妖怪は境界や外部に発生する」といつた空間論的解釈が

一世を風靡したことがあつたが、ここでは、話し手の具体的なディスクール分析により、よりリアルな解釈を示すことが出来ると考える。

29のエピソードも、「口裂け女の出現」という主題から連想されたものだが、ここで面白いのは、口裂け女をめぐるエピソードが、30「こわいい」とも31「面白い」とも両義的に受け止められていることである。32の「待つてたのかなあ」という言説も、屋上で必死にタイミングを窺つていたであろう口裂け女の様子を思い浮かべせる絶妙な発話といえよう。口裂け女は、一方では確かに「妖怪」「怪談」というジャンルに分類されるものだが、実際の「話」生成の「場」のディスクールに即して見た場合、「笑い」としても受け止められる。「怖さ」はときに「笑い」という視点で異化される。それは、「回想談」というファイルを経るとき顕著にならう。

次の33の発話は、論者が「調査者（質問者）」という立場を離れて、一つの話題を提供する話し手になつてゐる部分である。調査者は、決して透明な存在ではなく「メディア」として関わつてゐることを、こうしたテープ起こし資料は提示してくれる。

43の発話は、言説の中に親から聞いた話が入れ子状に引用されているものだが、ここでは、当時の「親」がどのような解釈をし、それを子どもたちに伝えるメディアとしてどう介在したのかを示しているといえる。続く発話も、親と並列的に子どもたちが接したメディアとの関わりを示す発話となつていえよう。

このように、テープ起こし資料によるディスクール分析から見えてくる「口承文芸」研究は、話の内容に基づく研究とは違つた姿を

見せてくれるはずである。論者は、話型分析やモティーフ分析を否定するものではないが、「口承文芸」研究を標榜する以上は、このような研究がもつと提示されるべきだろうと考えるのである。

三、地域の中で共有される「思い出話」的話題

論者の立ち会った「場」は、同窓会が多かったため、共有される「思い出話」なども確認できた。これは、「現代若者の話＝怪談」といった短絡的な思考を相対化し、若者たちが地域の中でのようない話》を交わしているのか、生活上の経験をどう「話」として造型化しているのか、ということを考えさせてくれる材料となる。

例えば、第六集では、論者を含む話し手たちが中学生のとき見聞きした一九八一年の水害の話を資料化した。

○話例・台風二十四号による水害話 長山直裕（昭和四三年生）

あの近くかな、Nんち辺り行つたら、おじさんがなんか、畳上げてた。そしあいに聞いたんだよ朝ねえ起きてねえ「なんか冷てえなあ」と思つたんだって足が。したらあ、「冷てえなあ」と思つて、猫飼つてたからさあそいつが小便したかと思つたんだって。猫こうやつてさあ、「この野郎」つて蹴つ飛ばしたらさあ、ふつと起きたらさあ、もう違うんだって。布団がフーッと浮いてるんだって（一同笑）。布団つづうか畳が。で「やべえ」つづつてすぐ二階に何か運んでえ。

これらは、地域の暮らしぶりを話すという「生活譚」の概念を展

開する上で注目したものであるが、近年の研究に照らしていえば、「人生を物語る」ことの研究⁽⁷⁾、「思い出話を回想談として語る」ことの研究⁽⁸⁾、「震災や戦災などの体験を言語化する」ことの研究⁽⁹⁾といつた問題へとリンクできる豊かな可能性のある視座だと考える。

また、「高校が少子化のために老人ホームになる」というウワサも、市川ではいくつか聞け資料化したが、こうした一見ローカルな話の背景にも、「現代」の世相や「学校社会」の姿が解析できるのである。

このようなローカルな地域の中で位置付ける研究は、初期の常光徳氏の論考に見られたが⁽¹⁰⁾、その後の研究の力点は、日本全国のカタログ作りに注がれているように思われる。その中にあって、久保孝夫『女子高生が語る不思議な話』（一九九七 青森県文芸協会出版部）は、一つの高校で聞けた話をまとめたものであるが、こうした民俗誌的な位置付けが、もつともっと進展されるべきであろう。

四、「口承」研究とエスノメソドロジーの潮流

第六・七集では、ほかにも現代若者の「話し手」像や、「靈感の強い友達」や「教師」という位相、学校という共空間のありようなどを具体的言説から浮き彫りにする資料を多數収めたつもりである。けれども、こうした「話」生成の「場」に則したテープ起こし資料による「口承文芸」研究は、いまだ「口承文芸」研究の学界では、あまり認知されていないように思われる。

だが、こうした問題を主題化した研究は、社会学の「エスノメソドロジー」⁽¹²⁾の中、「会話分析」⁽¹³⁾などとして展開されている。エス

ノメソドロジーとは、「ひとびとが普段、確固として変わることがない」と信奉して生きている「常識的なもの」を微細に解説し、解体・再編を志向していく方法であり、その具体的方法として「会話分析」が行われる。注目すべきは、「(従来の) フィールドワークで会話が資料とされる場合、そこで何が語られているのか、

という形で意味内容が問題となる。(略)しかし、(略)会話分析では、その入れ物に鋭いまなざしを向ける」という点であり、「自分の身体を投入しフィールドワークをおこない、相手との相互作用をより詳細に見よう」とすれば、「ごく自然に、フィールドワークをするわたしの「関心」や「存在」それ自体も調査対象となる」という点である。⁽¹⁴⁾

我々は、「□承文芸」を研究するものとして、こうした研究動向にも眼を注ぐべきであるし、むしろ、こうした研究に対し、積極的に発言をしていく学際性が求められるであろう。それなくして、既存の枠組みを自明のものとして研究を進めなければ、「□承文芸研究者というメディア」としての社会的自覚がなさ過ぎると言わざるをえない。

五、地方公務員というメディア

論者は、出来るだけ既存の研究の枠組みを相対化し、自らのフィールドワークに則った研究を進めたいと考えている。『市川の伝承民話』という資料集の提示も、その一つに他ならない。

この他、市川民話の会では、地域の民話を子どもたちに伝える活動を行っている。また、一九九九年度までは公共図書館の司書とし

て、子どもたちにストーリーテリングの実践も行って来た。⁽¹⁵⁾その図書館では、夏休みの事業として、子どもたちの知っているこわい話をアンケート募集し、それを掲示したりおはなし会で取り上げたり、冊子にまとめたりしている。

二〇〇〇年度からは、『市川の伝承民話』などの文化図書を所管する文化課に異動になり、今度はまさに、こうした活動を企画プロデュースする立場になつた。二〇〇〇年度は、ミレニアム事業として、市川に伝わる「真間の手児奈」伝説を利用した事業をいくつか展開している。

地方公務員という立場は、論者にとって魅力的なフィールドであり、こうした活動の中で、「□承文芸研究者」という立場を主題化しながら仕事を進めていきたい。大学などの象牙の塔に囚われて「講壇□承文芸学」の再生産に堕すことなく、自らの営みがどう社会と関わっているのかを自覚しながらフィールドワークすることが、論者なりのスタンスなのである。

注

- (1) 研究動向については、飯島吉晴「現代伝説研究の課題」(『□承文芸研究』20 「一九九七」) 参照。
- (2) 摘稿「同級生から聞いた学校話」(『不思議な世界を? 考える会会報』46 「一九九八」)。
- (3) 摘稿「市川民話の会編『市川の伝承民話』—「生活譚」の展開と可能性を中心にして」(『昔話伝説研究』17 「一九九二」)。
- (4) 市川民話の会編『市川の伝承民話』6 (一九九八 市川市教

育委員会)。

(5) 川田順造『口頭伝承論』(一九九一 河出書房新社)。

(6) □裂け女の研究視点については、宮本直和「□裂け女」流言の研究(『歴史民俗資料学研究』創刊号 一九九六 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科) 参照。もっとも、ここでは「回想談」として話されている点を考察する必要性があろう。

(7) 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』(一九九五 弘文堂)、櫻井美紀「創作への道—自分史を織り込んだ語りの実践ー」(『語りの世界』24 一九九七 語り手たちの会)、ロビン・ウーフィット「人は体験をどう語るか」(一九九九 大修館)、やまだようこ編著『人生を物語る—生成のライフヒストリーー』二〇〇〇 ミネルヴァ書房 他。

(8) 「現代のエスプリ エコロジカル・マインド」(一九九二至文堂) 所収の諸論文、野村典彦「仲間内の「あの話」」(『世間話研究』7 一九九七)、野村豊子「回想法とライフレヴュー」(一九九八 中央法規)、法橋量「体験と「日常の話」」(『世間話研究』9 一九九九) 他。

(9) 拙稿「『戦争話』の重み—沖縄・読谷村のガマからー」(『民話の手帖』50 一九九二 日本国語の会)、安克昌「臨床の語り—阪神大震災は人々の心をどう変えたかー」(『越境する知』語りつむぎだす) 二〇〇〇 東京大学出版会 他。

(10) 常光徹「学校の世間話」(『昔話伝説研究』12 一九八六)。

(11) 拙稿「民俗探訪」における□承文芸の記述方法—研究動向を踏まえた新たな可能性に向けてー」(『□承文芸研究』20 一九

九七)、拙稿『民俗採訪』における□承文芸の記述方法—世間話研究との関わりから』(『世間話研究』7 一九九七) 他。

(12) 山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』(一九九八 セリカ書房) 他。

(13) 好井裕明他編『会話分析への招待』(一九九九 世界思想社) 他。

(14) 好井裕明『批判的エスノメソドロジーの語り』(一九九九 新曜社)。

(15) 拙稿「地域の民話を題材に語ること」(『語りの世界』31 二〇〇〇 語り手たちの会)

付記 本稿は、二〇〇〇年度日本□承文芸学会大会での□頭発表「現代若者の□承文芸」世界—市川民話の会と市川市こどもとしょかんの調査資料からー」の一部を、高木史人「研究者というメディア」(『□承文芸研究』23 二〇〇〇) の問題提起を受けた特集に合わせて再構成したものである。成稿に当たっては、小池淳一氏・橋本裕之氏・高木史人氏ほかのご教示を得た。なお□頭発表ならびに本稿では、市川市こどもとしょかんでの取り組みについて十分に論じる余裕が無かつた。この点については、別に発表する機会を持ちたい。〔二〇〇〇年九月稿〕

(ねぎし・ひでゆき/市川市文化課)